

2014年3月16日 受難節第二主日礼拝

説教 足を洗うキリスト

ヨハネの福音書 13章 1-15節

【3. 11】

3度目の3月11日が来て、去りました。被災地、特に放射能の高い地域では、状況が分からないという状態にあります。それはつらいことです。私たちにも、状況が分からない中で歩いていかなければならないときがある。主イエスは最後の晩餐の席で、そんな中で歩いていくすべを教えてくださいました。

【足を洗うキリスト】

「この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された」(1)は胸を打ちます。主イエスは私たちを愛してくださる、残るところなく、愛を示して、愛を注いでくださる。ここにその愛のいくつかの輝きがあります。

第一は、足を洗うことは当時奴隷の仕事。主イエスは弟子たちにご自分の愛を刻んでくださいました。私たちは愛というものを、ロマンチックな感情だと思い込んでいますが、聖書の愛は、単なる感情ではなく、行動を伴う愛です。

第二は、足を洗っていただいた者たちの中には、主イエスを裏切ったユダも含まれていたこと。主イエスは、世にいる自分のものを

愛された。ひとり残らず。ご自分を裏切るユダをも引き戻そうとされた深い切ない愛。

第三は、十字架の愛。このできごとはいつ起こったか。過越の祭のとき。奴隷であったイスラエルが、エジプトから救い出された過越。小羊がほふられて、その血によって神が、イスラエルを過ぎ越された過越。イエスは過越の小羊のように屠られた。それは私たちを解き放つため、エジプトのパロよりももっと強い力で私たちを支配する罪の力から私たちを解き放つためです。

【水浴した私たち】

「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません」(10)。キリスト教会は、ここを救われた者たち、洗礼を受けた者たちと考えてきました。洗礼を受けて主イエスのものとされた者たち、その者たちはもう、きよい、その人の中にはもう、きよい生命が始まっています。私たちが自分を見るなら、救いはころもとないかも知れない。そんなときは、私たちを救ってくださった神さまのあわれみに目をとめたらよいのです。イエス・キリストの十字架が私たちを救うことができないなどと、どうして言えるのでしょうか。神のひとり子の血が不十分なわけがないのですから。

その私たちも足を洗っていただかなければなりません。宗教改革の始まりとされるルターの『95か条の提題』の最初の言葉は、

「われらの主にして師であるイエス・キリストが『汝ら悔い改めよ』と言われた時、それによってかれは、信じる者の全生涯が悔い改めであるべきことを欲しておられたのである」。信じる者の全生涯は悔い改め、御子イエスの十字架の恵みに現れた神さまのあわれみの中に自分を投げ入れ続ける生涯。そうやって恵みにとどまり続け、キリストにある新しいのちに生きる生涯。そのためには、キリストに足を洗っていただかなければなりません。人生を歩む中で、絶えずまとわりつく愛の足りない生き方を洗っていただき、新しくしていただくのです。

【足を洗い合う私たち】

「あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです」(14)。たがいに対するあわれみに胸を熱くしながら足を洗い合いなさい、と主イエスは命じた。愛し合う。熱いあわれみの心で覆い合う。とても覆う気になれない相手に、自分を与えて生きる。そのように生きる力は主の十字架と復活にあります。主につながるときに、主から流れる生命にあるのです。

人となってくださった主イエスは、私たちのすべての思いを経験してくださったお方。愛し合おうとするときの困難も、主はすべて知っておられ、そして、私たちの手にご自分の手を添えて、困難を超えさせてくださるのです。